

THE CITADEL



A. J. CRONIN

城

砦

ク ロ ー ニ ン
中 村 能 三 譯

新 版 世 界 文 學 全 集

27

新 潮 社 版

新版世界文学全集 27

城 砦

昭和三十三年十月二十六日 印刷
昭和三十三年十月三十日 発行

定価 参百五拾円

地方
売価 参百六拾円

訳者 中村能三

発行者 佐藤義夫
東京都新宿区矢来町七一

発行所 株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一

電話東京 四七一〇八番
振替東京 八〇八番

乱丁・落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

印刷 東光印刷株式会社
製本 荒木製本所

© Printed in Japan

解 説

どんな作家でも、作品ぜんぶをみれば、そのなかには、粗雑な言葉ではあるが、いわゆる愚作と傑作とが同居しているのが常である。だから、作家が自分で編集した全集などには、ある特定の作品を削除することがある。しかし、そういうくだらない作品を書いた、あるいは現在書いているからといって、過去の作品の価値までさがするものではない。たくさんの作品はすべて忘れ去られながら、『ロビンソン・クルーソー』だけは、古典としていまだに愛読されているデフォールの場合など、さしずめ、このいい例である。作品というものは、作家の手をはなれて、いったん^{おおよ}公けにされれば、げんとして存在する客観的事実になってしまふ。それは制作されたときのままの価値を持ちつづけ、批評家や読者の批判にたえなければならない。

しかし、ここに訳出した『城砦』の作者ほど、傑作と愚作とが同居している作家もすくないのではなからうか。ことに、初期の作品より後期の作品のほうが、だいたいにいってつまらないのは、なにか理由があるにちがいない。

『城砦』はクローニンの作品のうち、最もすぐれた作品であるという一般の批評でもあり、初期から後期へとうつる曲り角に位置する作品であつて、この後、『天国の鍵』『育ちゆく年』『スペインの庭師』などの佳作を発表したとはいへ、将来これ以上の作品を書く見込みが非常にうすいことを考えると、これは一人の作家を研究する上で——クローニンが研究に値する作家であるか否かは別として——まことに格好な作品のようである。

クローニンの作品は、拙訳の分もふくめて、最近かなり紹介されたので、いまさら退屈な経歴などなくもがなと思うが、この『城砦』は、以上のような意味もあり、自伝的色彩のつよい小説でもあるので、はじめてこの作家の作品に接する読者のために、簡単にその略歴を書いておくのが、解説の常道であらうと思う。

アーチボルド・ジョージフ・クロニン は、一八九六年七月十九日、イギリスのダンバートンシャーのカードロスで生れた。父はパトリック、母はジェシー、二人の間の一人息子であった。はじめダンバートン・アカデミーで教育をうけ、一九一四年、グラスゴー大学で医学を専攻していたが、たまたま第一次世界大戦に際会したため、一時学業を放棄し、海軍軍医中尉として従軍した。

一九一八年に復員して、ふたたびグラスゴー大学に学び、一九一九年卒業後は、インド航路の船の船医をやったり、ペラハウストンの施療病院外来患者係をふりだしに、グラスゴーのライトバーン 隔離病院の医務部長まで、いろいろな勤めをへて、一九二二年から二四年まで、南ウェールズの炭坑嘱託医として働いた。二一年には同じグラスゴー大学卒業のアグネス・メリー・ギブソンと結婚したが、この南ウェールズ時代に、公衆健康医、王立医学会会員の資格をとった。二四年には鉱山医務監督官に任命され、イギリスじゅうの鉱山地方を視察し、二五年には医学博士の称号を授けられた。この数年間の鉱山地方の体験は、しばしば作品のなかに取り入れられ、多彩で豊富なその作品の肥料となっているようである。一九二六年には職を辞し、ロンドンに出て、ウェスト・エンドで開業し、家業おおいに繁昌した。

彼はもともと努力型の人物で、さきに触れたイギリス最高の三つの学位にしても、生活のための医業のかたわら、非常識ともいえる勉強をつづけて獲得したものであるが、開業してからも満足するところを知らず、つぎからつぎへと仕事を拡張した。

開業医としての名声はあがったが、その間の過労がたたって、一九三〇年に健康を害し、専門医の勧告にしたがって、スコットランドのウェスト・ハイランドに転地し、病をやしなつた。

処女作『帽子屋の城』を書いたのは、この療養生活中で、一九三一年にこれが出版され、爆発的な成功をおさめた。この成功に勇気をえて、それまでながい間あこがれて来た文学に専心することに決心し、以後、最近作

『ザ・ノザンライト』にいたるまで、次々と力作を発表し、今日ではおしもおされもせぬ世界的流行作家となつた。

以上がクロニンンの略歴であるが、これをみてもわかるように、処女作を書いたのは、三十幾歳の、いわば中年であつた。もっとも評伝者流に書けば、すでに十三歳にして全国コンクールに歴史上の論文を出し、その年の最高の金牌を受けたということだから、文学的才能はつとにあらわれていたといつて差支えあるまい。事実、少年時代から、医者として生活している間も、文学には非常な関心をもち、内外の文学書を読んでいて、文学的素地は十分にちかかわれていたことは想像できる。

彼の愛好作家は、ロマンティックな面では、ステイブソン、スコット、コンラッド、リアリスティックな面では、バルザック、モーパッサン、フローベルなどで、現代作家としては、アーノルド・ベネット、シンクレア・ルイス、サマセット・モームなどに心をひかれてゐるらしく、これらの名前をあげただけでも、彼の作風は大体わかると思う。ジョイスやウルフの新心理主義的なものには眼もくれず、リアリスティックな手法でおしとおす頑固さを持っている。古き、よき時代のイギリス文学の伝統かもしれない。

背がたかく、砂色の髪、六十歳を越した現在では童顔というほどではないが、年よりはずつと若くみえる、とのつた顔貌、趣味はゴルフ、テニス、釣、園芸、少年時代は熱心なフットボールの選手だったと言へば、まさしく、われわれにはイギリスの典型的な紳士をしか想像できない。クロニンに奇矯にして強烈なものを求めるのは無理かもしれない。

宗教はカソリック、医学者としては真摯な科学的真理の探求者であつた彼が、どのようにして宗教と科学との婚姻をなしとげたのか、作品からだけでは判然としない。しかし、文学上では燃えるような人道主義者で、貧富の階級、資本主義の悪などの問題にも、医者という職業上、相当の関心を持っているが、それを過激な階級闘争にすむべき矛盾とは受けとらず、人道主義的な情熱をもって、つねに嘆き、憤り、苦悶している。

作家としての名声が非常に高くなったため、医学者としての彼の業績はあまり評価されていないが、『イギリス炭坑における応急手当の状態に関する報告』『無煙炭坑内の炭塵吸入についての報告』の二学術評論、および『動脈瘤の歴史』という博士論文は、ある意味では画期的な業績といわれている。

クローニンが今年までに発表した十数篇の長篇小説を系譜的にたどると、処女作『帽子屋の城』第二作『三つの愛』は、人間個人が持つなんらかの執着に、しつようなほどくいさがり、人間の強さと弱さを、そして、人間が持つ執着の故に、やがては悲劇におわらざるを得なかった経路を描いている。

この人間の執着は、小説家を非常に魅惑する主題で、どの国のどの時代の作家も、多かれ少かれ、これを描くことに魂をうちこみ、バルザックなどは『人間喜劇』全作品を、この主題でつらぬいていると言ってもいいほどである。初期のクローニンも、あきらかにバルザックの影響をうけ、あるときはマニヤとして、あるときはオプセッションとして、この執着を描き、高く評価されていい成功をおさめている。いわば素人作家だったので、辞書と文章宝典をそばにひきつけて書いた、と当人も言っているだけに、たどたどしい、いくらか冗漫な文章ながら、すでに旺盛な表現力をみせ、凡庸作家でないことを示している。

ところが、第四作『星は地上を見ている』になると、クローニンの眼がにわかに大きく転回した。それまでの作品では特異な人物を拉しきたって、その性格や心理を追求し、人間個人の宿命的な悲劇を、冷酷ともいえる筆致で描いたのであるが、それはあくまで個人を描くことに終始し、集団としての、あるいは機構としての社会は、個人の背後にかくされ、そのなかに隠顕する矛盾や悪徳は、それらの温床としての社会の疾患としてではなく、個人の性格的執着とか頑迷とかが、発展し撞着する場としてのみとらえられている。この第四作では、作者の眼は背後の社会に注がれるようになった。作中の人物は、もはや個人として生きているだけではなく、作者が描こうとする社会の産物としての人物となった。このことはクローニンの発展でもあったが、また一方からいえば

作風の混濁ともなった。

社会を見る眼に狂いはなかったのだが、もう一つも二つも突込みがたりず、いきおい、個人を描くときの執拗さも強靱さも見る事ができない。このことは彼のその後の作品に、あきらかな「甘さ」としてあらわれている。そのかわり、手法的には第三作までの幼稚さやたどたどしさから抜けだすとともに、文章のテンポが急に速く、あるときは映画的手法といえるほどになり、したがって、それまでの作品よりプロットを重んずる傾向がようになった。

ここに訳出した第五作『城砦』は、作者のこういう時期に生れたものである。

読者もすでにご存じであろうが、現代のアメリカに『失われた世代』^{ロスト・ジェネレーション}の作家とよばれる一群の人々がある。フークナー、ヘミングウェイ、ドス・パソス、フィッツジェラルドなどをさすのである。これらの作家たちは、いずれも第一次世界大戦を青年時代に経験し、みずから戦争の渦中に身を投じ、その残酷さと無意味さを眼のあたりに見た、当時の『戦後派』であった。その受けとり方は、それぞれ個人的な傾向や気質によって異ってはいても、人類の福祉と世界の平和の名において、殺戮、陰謀、憎悪、裏切、貧困など、あらゆる悪徳が、公然と行われた戦時戦後の世相を、みずからの生命とともに体験し、いちように、すべての人間的尊厳を見失い、底なしの虚無のなかにひきずりこまれた人たちなのである。

彼らを年齢的にみると、だいたい一八九〇年代に生れている。第一次世界大戦を、彼らが二十歳台のはじめに経験したことは、この際きわめて重要である。彼らがもすこし早く生れたか、もすこしおそく生れていたならば、同じ彼らもちがった彼らになっていたかもしれない。彼らの眼は統一より矛盾に、光明より暗黒に、美より醜惡に向けられ、どうにもしがたいかと思われる、人間の生きてゆく苦悩を直視するようになった。それらのものを描くことが、自分たちの使命であるごとく思われた。すなわち『失われた世代』の産物なのである。彼らはそうしたもののなかから、起ちあがり、彼らが失ったもののなかから偉大な「アメリカ文学」をうちたてた。新世界

にアメリカ人によって「文学」が創造されたのである。

ついでながら、このことを第二次大戦後の世界文学界の収穫と比較するのは、まことに興味深い。ルネサンスの昔から、世界的な動乱や、思潮上の転換期には、偉大な作家が群をなして輩出するものであるが、すくなくとも世界の二大国であるアメリカとソヴィエトでは、いまのところ、こういう現象は見られないようである。これは自由の過不足に原因するのではないかと疑われる。アメリカだけに限定して言えば、その繁栄がわざわざいし、優等生的文学が迎えられ、いわゆる『怒らざる若者たち』ばかりになったらしい。

話をもとにもどして、『失われた世代』のアメリカの作家たちが、パリやアメリカで絶望し苦悶している頃、古い世界でも、やはり絶望し苦悶していた作家があった。クローニンもまさしくそのうちの一人であった。彼は『失われた世代』の作家たちと、完全に同時代人である。同じ世界的動乱のなかで呼吸し、同じ社会的矛盾を見、同じ人間の醜悪さを体験し、人間の無知に絶望していたのである。

ところが、クローニンは『失われた世代』の作家たちとは異って成長した。芸術上の制作は個人の稟質によることが多いので、同じ環境にあっても、それぞれ異った作品として生れることは当然であるが、クローニンはアメリカの作家たちとは、現実の受けとめ方がちがっていたのである。ここにおいて、さきに触れた彼の「甘さ」が問題になってくる。

現在のクローニンは、わが国でいう「大衆作家」にちかい地位を与えられていて、いわゆる「大衆小説」を軽蔑しない民族のあいだでは、かならずしも当を得ていない待遇でもないように思われる。しかし、彼ほどの作家的稟質と手腕を持ち、初期にはあれほど豊醇で執拗な作品を書きながら、しかも「大衆作家」的名声を博したのは、理由がなくもないようである。

一言でいえば、これは彼の「惚れっぽさ」によるもののようである。彼は人生の街角で出会うひとつひとつの事件に惚れこんでしまう。誰でも感激しそうなところで感激し、しかも誰でも感激させる術を心得ている。大き

な社会的矛盾にぶちあたりながら、彼はそこにささやかなヒューマニズムの一片を見出して感動し、その根底に横たわるものを見逃しがちである。世の中の悪を見て悲憤し糾弾するが、その惡に挑む武器としては、「人間の善意」しか持っていない。そして、このささやかな武器にすっかり信頼してしまう。精神主義への偏向、カソリック教への回心など、彼としては当然の帰結なのかもしれないが、厳しさを失った感傷主義へ、ともすれば陥りがちなもの、またやむを得ない次第であらう。

クローニンとよく比較される作家はモームである。二人とも医業をおさめ、しかも文学者として成功し、人物創造や性格描写に卓抜堅固な力をみせながら、一方では読者の興味をひきずって行くだけの達者さを持っていることなど、非常によく似た作家といえよう。でありながら、モームを本格的な作家、クローニンを大衆的な作家と言いつつ傾向があるのは、単にモームがシニカルであり、クローニンが素朴であるという意味ばかりでなく、モームのなかにある、なにか鉄壁のようなものが、クローニンには不足しているせいではないかと思われる。このため前述のようにクローニンが「惚れっぽい」、すくなくとも「惚れる」相手がモームと異ってくるのではなからうか。

クローニンが世に出たとき、ある批評家は彼を目して「新しきディケンズ」と称揚した。彼が正しい意味のディケンズのものを持っていることには、さして異をさしはさむこともないようである。しかし、不幸なことにディケンズが持っていた小さな弱点を、クローニンは大きな弱点として持ってしまった。それは両者の「早すぎた成功」のなせるわざである。二十五歳で処女作『ピクウイク・クラブの記録』を発表して、一躍名声をかせたディケンズは、その名声を持続するために、読者の「御機嫌を取結ぶ」ことを必要と考えた。クローニンの場合も、やはりこのことが言えると思う。彼は読者をとにかく感動させ読者の心をつかまねばならなかった。そして、初期の作品によって得た名声が、どこから生れたものであったか、その文学的本質を見うしない、ただ読者を感激させることのみに努力した嫌疑がこい。ことに、このような傾向は、『コリヤーズ』その他の雑誌に連載

するようになって、いっそう強く見られるようである。

こんなふうに、新作を発表すれば、かならずベストセラーになり、すぐ世界各国語に翻訳されるほどの流行作家にはなったが、高度の、あるいは狭義の文学的批評にたえるだけの作品をこんご書くということは、いまのクロニンにはちょっと期待できない。しかも、彼が過去には『帽子屋の城』や、この『城砦』のような高く評価される作品を書いた作家であることは、否定できない事実であり、この小文の冒頭に書いたように、よしんば現在のクロニンがどんな作品を書いているようにとも、この『城砦』は二十間にわたって、世界じゅうの人々に読まれつづけて来たのである。事実、世界じゅうで数多く出版される小説で、これほど読者に感銘を与える作品を、わたくしはほとんど知らない。「偉大な小説家である医者によって書かれた、医者をも主人公とする偉大な小説」という出版社のキャッチ・フレーズは、額面どおり受けとっていいようである。これを翻訳したわたくしと、これを読んだ読者とは、けっして時間を無駄についやしたとは後悔しないであらう。

わたくしの訳本『城砦』は、すでに新潮文庫として刊行されて来たものであるが、これは戦後勿々の際の翻訳とはいいいながら、部分的にはお恥かしいほどの誤訳があることに前々から気づいていたので、本全集におさめられる機会を利用して、完全に改訳した。しかし、文庫版が、誤訳はあるにしても、原作を理解してもらおう上では、すこしも差支えない翻訳であったことを、いままなおいささか自負している。

文庫版では、テキストはイギリスのヴィクター・ゴランツ版を用いたが、こんどはアメリカのリトル・ブラウン版を用いた。原作者がアメリカ版を決定本として希望しているそうだからである。しかし、この両版のちがいは、ほとんど人名や日付けにかぎられていて、文学上の推敲の結果だとは受けとりがたく、何故の変改か、理解しがたい場合が多かった。おそらく、文学以外の理由があったものと想像される。

なお、第一部に出てくるウェールズ地方の固有名詞は、特殊なものをのぞき、ほとんどイギリス語読みにした。

ウェールズ語とイギリス語とは、まるで外国語ほどのちがいがあり、一二八四年にイングランドと併合の際、イギリスの皇太子をプリンス・オブ・ウェールズと称することになったが、そのときのウェールズ側の条件の一つに、皇太子はウェールズ語を知っていることという項目がくわえられたほどである。有名なアメリカの映画監督グリフィス氏はウェールズ出身で、Griffith であるが、ウェールズでは、Gruffydd と綴り、グルフィドと発音されていた。わが国でも北海道などの地名を正確に読む人がすくないように、アメリカをはじめ、イギリス本土をもふくめて、あらゆるイギリス語民族は、ウェールズ綴りの場合、そのままイギリス語読みになっていることが多いし、また、これを日本語のカタカナでウェールズ語読みにしたところで、かならずしもウェールズの地方色が出るとはかぎらないことが、イギリス語読みにした理由である。

以上、翻訳をするにあたっての蛇足をつけくわえておく。

一九五八 秋

中 村 能 三

目次

第一部	一五
第二部	一〇一
第三部	二〇三
第四部	二九

Title : The Citadel
Author : Dr. A.J. Cronin
Originally Copyrighted by Dr. A.J. Cronin
Copyrighted in Japan by SHINCHOSHA
through arrangement with C.E. Tuttle Co.

城

砦

